
After chronos

天月 琉架

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

A f t e r c h r o n o s

【Nコード】

N 7 7 3 6 G

【作者名】

天月 琉架

【あらすじ】

何がどうなっってこんなコトに！？王道BL小説『chronos』の番外編。本編では描かれることのなかったサブキャラクターたちのお話で、短編集です。本編の最終回をご覧になってからお読みください★

響の場合。

「ちよっ…ちよい待てや！御堂^{みどう}ってば！！」

俺、藤島^{ふじしま} 響^{ひびき}はめちやくちや焦っていた。

原因は目の前をスタスタ勝手に行ってしまうこいつ、御堂^{みどう} 馨^{かおる}のことだ。

厚顔不遜でわがままプー、はっきり言ってあんまり関わりたくない部類の人間だが、どうしても俺はこいつの機嫌を損ねるわけには行かなかった。

「悪かったってば…っ、忘れてたわけやないんやって！」

「……………」

御堂は必死について行こうとする俺をチラリと盗み見ると、やはり無言のまま駐車場へと歩いていく。

(なんっつつやねんっコイツ…っ)

俺はついついイライラしながらご機嫌を取る。

今日は週に一度、御堂と会う約束の日だった。

もちろん俺は忘れてなどいない。

けれど、後輩の宮沢斗真から美味そうなアフタヌーンティーを勧められてついつい遅刻しそうなのを忘れてしまっただけだ。

食い意地の申し子と言われたこの俺が、目の前のご馳走を放ってなんかおけるかいっ！！

しかも学生には高価で中々手が出せない、職員棟のカフェテリアの裏メニュー・アフタヌーンティースタンド。

美しく3段に盛られた軽食は、もはや軽食と呼ぶことすら恐れ多いのだ。

1段目には彩りよく並んだサンドウィッチとスティックサラダ。

2段目にはブルーベリーのスコーンとプレーンのスコーンが盛り付けられ、それにクロテッドクリームをたっぷり付けて頂く。

最後の3段目には、季節感たっぷりの苺のケーキが。

これでもかと言うほど贅沢に苺が乗っている。

まさに極上の午後のひと時を過ごせる高級菓子である。

（くうく、こいつが来い^きひんかったらケーキまで食べられたハズやのに…っ）

ついつい未練が残ってしまう。

途中までではあったが、サンドウィッチもスコーンも物凄く美味しかった。

特にあのカフェテリアお手製のクロテッドクリームは絶品であった。思わずじゅるりと涎が垂れそうになるが、それはグツと我慢してヤツを追いかける。

「なあっ…御堂ってばどおおうわあああっ?!?!?」

いきなりガツと抱き上げられて、そのまま車の中へ押し込められた。御堂は甚^{いた}くご機嫌が斜めで、やることなすことがまるで子供のようだ。

ほんまにコイツは社会人（しかも社長）か!?!と疑いたくなる。

いや、本気で思う時も結構あるのだが…。

「なんつやねん、急に…んむむっ」

「…少し黙れ」

煩いとはかりに唇を塞がれて、身体を押し付けられた。少しだけ苦い煙草の味と、忍び込んでくる柔らかい舌。

拘束してくる腕は力強いのに、口腔を撫でる仕種は思いのほか優しくかった。

響のそれを慣れた様子で絡め取ると、きゅっとキツク吸われる。

ジ：ンと頭の中が甘く痺れていくのを感じていた。

（もう：マジでなんなんやねん：っ）

施される口付けに応戦すると、今度は服の下から手が忍び込んでくるのを感じた。

「ちよっ：まっ：」

んなトコ何やっとなねんーっ！と抵抗したくとも濃厚なキスで誤魔化される。

御堂は思いのままに響の身体を蹂躪し始めた。

下着の上からやんわりと触れると、それだけでびくっと反応をしてしまう。

長年慣らされた身体は、僅かな刺激にも敏感に反応するようになってしまった。

「み：どう、ちよい：待ちいやって：っ」

「お前は私のものだ。どう扱おうと、私の勝手だ」

「んあっ：ばっ：……」

相変わらず傍若無人なこいつの態度にムカつく。

誰がお前のものだったの！！

俺はタダチケが欲しいだけであって、代わりにこんなことしてるだけであって、決してお前なんかが好きじゃないうっのうっのうっ！！！！

そう。

俺はこいつと契約している。

タダで様々なイベントのチケットをくれるというから俺は喜び勇んで飛びついた。

それは中々手に入らないプレミア付のものであったり、関係者しか手にすることが出来ない特別なシートであったりと、それはそれは喉から手が出るほど欲しいものばかりであった。

しかしそれは言葉通りの無償ではなくて…。

代償は、俺の身体だった。

もちろん最初は嫌がったが、御堂の手からもたらされたのは激しいほどの快感だったのだ。

いつの間にか施される行為に溺れ、気がついたらこんな関係になっていた。

だから俺は、こいつの機嫌を損ねるのが恐ろしい。

それはすなわち、そのままわが身に直結して降りかかるからだ。

今もそれは健在で、機嫌の悪さをそのままに荒々しく貪ってくる。まるで俺の身体は全部己のものだと言わんばかりにしつこく愛撫を重ね、自らねだるまでそれは永遠と続いていく。

「くうっ……」

「響……」

促すように御堂が低く囁く。

でも俺は頑なに首を振った。

いくらスモークシートが張られているとはいえ、真昼間の車の中。しかも自分の通う大学の駐車場だ。

あまり人気がないとはいえ、やはり外の様子が気になってしまう。

嫌だ意思表示をすると、それが気に食わなかったのか俺を責め立てる指先に力が入った。

痛いくらいに握りこまれて、思わず声が洩れてしまう。

「やっ…やめっ…」

痛みと快感で涙目になりながら御堂を睨むと、蜂蜜色の瞳には鋭い欲情に濡れていた。

その扇情的な表情に煽られて、我慢していた^{たが}箍が外れそうになる。

なんだってこいつは無駄に綺麗な顔しとるんやっ…！

「お前は私の言うことだけ聞いていればいいんだ…響」
「ふっ…くっ…んっ」

傲慢な独占欲。

降り注がれる言葉はどれも偉そうなのに、何故か切なく聞こえてしまうのはどうしてだろうか。

耳元に落とされる声に、鼓膜が甘く震えるのを感じた。

「もっ…無理や…っ」

「して欲しいなら、ちゃんとお願ひしろといつも言っているだろう？」

拷問のように寸前で望むものを与えてはくれない。
僅かに足りない甘い痺れだけが全身を苛んでいく。

その言葉を言うのは本当に嫌なのだが、もう切羽詰った自身をどうにかしなければ気が狂いそうだった。

「は…やく、シテ…かおる…っ」

「お願いが足りていないが…まあいいだろう。してやるよ、響」
「ふああっ…」

突如激しく与えられる快感が電流みたいに全身を駆け抜け、あつという間に達する。

御堂は響の放ったものを丁寧に舐め取ると、満足げに微笑んだ。

「濃いな。放っておいた間、自分ではしなかったのだな。そんなに私が欲しかったか」

「んなっ…！」

自分の都合の言いように解釈する御堂に、心底呆れる。
というか、そんなものの口に含みながら笑わないで欲しい。

いつもながらに勝手な主に、響は気が遠くなった。

ああ、このまま気を失いたい…とぼたりとシートの上に横たわる。
無駄に広い車内。

運転席を後者席は仕切ることが出来る造りになっていて、本皮のシートはふかふかとしていて庶民がこんな高級車に乗る機会など滅多にないだろう。

なんだってこいつはこうも贅沢なもんばっか普通に使っているのか。
自分には到底理解出来ない嗜好であった。
憧れはするけれど。

「帰りたい…」

出来れば今すぐ。

思わず零れた本音に、御堂はニヤリと意地悪く笑う。

「そうか。今夜はお前の好きな中華料理の店に連れて行こうと思ったのだが」

「なんやて!？」

その言葉にガバツと起き上がる。

御堂が連れて行ってくれるお店は、どこも美味しく量もかなり用意してくれる。

おまけにそれらは全て御堂の奢りなのだ。

他の人間に奢られることには抵抗感があるが、御堂であれば話は別だ。

こいつは無駄に金持ちなのだから、それくらい痛くも痒くもないのだ。

そんなヤツに遠慮する義理など何処にもない。

「じゃあ、付き合うな？」

「うぐっ…」

暗に、今夜はずつといろと言われて言葉に詰まる。

（長時間こいつと一緒になんて息が詰まるわ…でも中華…ううつ）

目の前の食欲と、自分の身の安全。

どっちも大事だがどっちも取りたい。

そんな響の葛藤を知ってか知らずか、御堂は問答無用で車を滑らせ始めた。

「ええいつ、なるようにしかならんわっ」

どうにでもなれっ！と投げやりになるが、もちろん後で後悔することになる。

中華料理をたっぷり堪能したあと、今度は自分が食べられてしまうのだから…。

それが目に見えて分かっている御堂は、楽しげに笑っていた。

「うわぁーっ、やっぱ俺のアホああおおおっ！！」

「ふっ、やはりお前は私のものだ…ずっとな」

いやだあああああっつと叫ぶ声は、熱い口付けによって塞がれてしまったのだった。

響の場合。(後書き)

前からやりたかった響が主人公のお話です。

響が似非関西弁なのは、作者がバリバリの関東出身のくせに方言が好きだからです^^；

一応、裏設定もありますけど…。

ああ、本家の方ゴメンナサイ。

オカシナところはスルーでお願いします！

ハイテンションで、とても書きやすいキャラクターでした♪

悠の場合。

何でこんなコトに…。。

幾度そう思ったのか知れない。

自分がこうも簡単に流されてしまえば、もはや親友・斗真のことを悪くは言えなくなってしまう。

それだけは避けなければと自ら罫に飛び込んでいけば、やっぱり止めておけば良かったと後悔する。

僕、五十嵐いがらし悠はるかは何度目か分からないため息を吐いた。

色素の薄い自慢のふわふわの髪を手櫛でゆるく搔き、苛立たしさをどこかへ逃がそうとする。

ご立腹の元凶・
崎

龍一は、先ほどからヤツのご自慢のキツ

チンに籠っている。

何で僕がヤツの部屋のリビングにいるのかって？

それは僕が聞きたい。

いや、マジで。

あの無愛想・無関心・完璧主義の北条の実の叔父である崎は、北条以上にマイペースで強引だ。

自分の思ったように行動するし、周りも巻き込む。

世界は自分が中心で回っているとでも本気で思っているのかもしれない。

普段は温厚で紳士ぶってるヤツだけど、本当はとんでもなく鬼畜だ。口調も違えば態度も違う。

「ただけネコ被ってんだよお前!」と思い切り罵ってやりたいくらいだ。

…言ったら最後、どんな被害に遭うか分からないから言わないけど。

親友である斗真はヤツを良い人だと信じて疑わない。

僕は最初から不穏な空気を感じ取って警戒していたが、案の定だった。

正面切って思いっきり嫌ってやったし、キツイ言葉も何度か投げつけた。

それなのに何故かヤツは僕を気に入り、こうして罨に嵌めようしてくる。

何度も抜け出そうとするけれど…悲しいことに、向こうの方が歳の差分だけ上手だった。

「出来たぜ」

ようやく出て来た崎は、トレーに2客のティーカップと小皿を乗せて持ってきた。

悠の座っているソファの目の前にあるサイドテーブルにそれらを丁寧に並べると、当然のように隣に腰を下ろした。

「アンタも飲むの？」

こっち来んなつとばかりに崎から離れて嫌そうに言う。

右側のティーカップの中には爽やかな香りが漂い、とても美味しそうだ。

左の方は甘酸っぱい花の香りがしている。

どちらを口にすればいいのか分からないが、出来ればどちらも試してみたいものだ。

小皿の上には焼きたてのシフォンケーキ。

鮮やかな緑茶色をしていて、ホイップクリームが添えられていた。

崎はそれらを全て悠の方へと向けると、近すぎず遠すぎない絶妙な距離感を取って答える。

「いや、俺は食べない。このケーキに合うのはどちらのカップの方が良いのかを聞かせてくれれば良い。そうだな…薫りとデザインだけで答えてくれればそれでいい。飲むか飲まないかはお前に任せよう」

「…？何かヘンなもんでも入れたの？」

「…さあな」

崎は意味深に微笑むと、それ以上何も言わなかった。

早くしろとばかりにこちらの様子を窺っている。

確かに冷めてしまうと薫りや風味が落ちてしまうので、悠は仕方なく始めることにした。

今日は崎のお店で出す初夏の新作の試作品を見に来ていた。

本当は斗真を連れてきたかったらしいが、偶然それを知った悠が猛烈に反対。

崎が斗真に目を付けていたのは視線からして分かっていたし、ぼんやりしている斗真をこんな鬼畜・猫被り男と二人きりにしていたらどうなるのか目に浮かび、心配でたまらなかったからだ。

おまけに悠は崎のことが大嫌いなことから尚更である。

なので、上手く言いくるめられて悠がヤツの部屋へと行くハメになったのである。

さもなくば斗真を連れ込む、としつかり脅されて。

しぶしぶ悠は最初に右のカップを手に取り、ゆっくりと薫りを堪能することにした。

柑橘系の爽やかな香りと、その奥に潜む僅かな甘み。

グレープフルーツのようなさっぱりとした感じと、マンゴーのような独特な甘さが垣間見える。

果物系のフレーバーをベースにしたものなのだろう。

それが分かったところで一旦カップを戻し、ケーキをひとくちサイズフォークに刺して口にする。

早摘みの抹茶の風味がほんのり口の中に広がって、スポンジのふわふわした食感と甘さが絶妙だった。

もくもくと咀嚼すると、生地練りこまれた抹茶の味が滲み出て美味しかった。

先ほどの様子から何か妖しげなものでも入っているのかと思った悠は、恐る恐るティーカップを持ち上げると蜂蜜色の液体を少しだけ口に含む。

薫りの風味をそのままに、ふんわりとした華やかな味わいが舌の上に広がった。

（あれ、思ったよりちよつと…）

想像よりも少し違う。

…どこか違和感を感じるけれど、それほど気にするほどでもない。

逆に、あまり口にしたことのない独特の甘みがクセになりそうな喉越しだった。

今度は左のカップ。

ゆつくりと口元の方へ運び、スッと薫りを探る。

しつこくない花の甘い香り。

アールグレイをベースに少しだけローズヒップの酸味とミントのようなハーブ系が織り込まれている。

一見アンバランスに思える組み合わせだが、全てが交じり合って薫り高い風味を生み出していた。

（あっ…コレ、イイかも）

珍しくヒットの予感がする。

ワインレッドのような深い紅と、初夏を感じさせる鮮やかなグリーン。

見た目もパステルカラーのように優しくて、悠はこの組み合わせを気に入った。

もう一度シフォンケーキをひとくち食べて、それからカップを口にする…と、悠はいきなり行儀悪く吹いた。

「ぶふおっ…ごほっ…何コレ…っっ」

ふわりと鼻を吹き抜けるアールグレイ特有の穏やかさとハーブの香り。

あとからじんわりと染み渡るローズヒップの酸味。

それらのバランスをすべて台無しにするほどの甘さが喉を焼き尽くしていた。

甘いなんてものじゃない。

激甘を通り越してもはや甘味料そのもの。

ガムシロップを飲んでいるような感覚だった。

悠は口直しをするために右のカップの紅茶を一気に飲んだ。

口の中に残る甘いだけのものを流し込むように飲む干すと、ふいに崎が不穏な笑みを浮かべた。

「だから言っただろう？『飲むか飲まないかはお前に任せよう』ってな」

「だからってこんなモノを人に出すなっつ。せっかく人が真面目にやってるのに台無しにしやがって…っ」

「で、どうだ」

「どうだって…？」

「俺は『薰り』と『デザイン』についてだけ答えろと言ったはずだ」

人を苦しい目に遭わせておいてなんてヤツだ。

早くしろと視線で訴えられると余計に腹が立つ。

なんだってコイツはこんなにも自己中で勝手なヤツなんだ…っ！

悠は素直に答えるつもりなど毛頭なくて、苛立たしさを隠さずに睨みつける。

「どっちでもいーんじゃない」

フンッと投げやりに答えると、その答えを待っていたかのようにニヤリと崎が嘲笑う。

人を見下したような視線を投げて、わざと悠の怒りを煽った。

「お前はバカか？そんな態度を取るんなら、斗真くんを呼ぶことにするだけだ」

「なっ…」

その言葉にカチンとくる。

それではいったい何のためにわざわざ大嫌いなコイツと一緒にいると思ってるのだ。

悠は視線だけで射殺してやりたいくらいの殺気を放って崎を見つめる。

しかし敵は、それすらも分かっていたかのように満足そうに笑うだ

けだった。

「ほら…どっちだ？」

クイツと悠の顎を指に掛けて持ち上げる。

唇が触れそうなくらい近くに顔を寄せられて、悠は腕を払った。

…はずだった。

実際には悠の右腕はふにやりとソファの上に横たわり、座っている足にも力が入っていない。

悠は自分の身に起こったことが瞬時に理解出来ずに焦った。

「なっ…どうゆうことだよっ!？」

思うように動かない身体。

段々とその白い肌に赤みが差し、体温も上昇していく。

崎はその様子を冷静に観察していると、勝者の笑みを浮かべた。

「さあ…どうせあとで分かることだ。お楽しみは最後にとっておこうか？」

「ふっ…ざけんなっ」

力の入らない腕を必死に動かして抗おうとするが、アッサリと手首を掴まれて後ろに押し倒される。

ソファの上に身体が沈みこみ、身動きが出来ない。

起き上がるうにもヤツが上に^の押し掛かっ^てきていてどうにも出来なかった。

「…何のつもりだよ」

男に押し倒されるのは趣味じゃない、と汚いものを見るような瞳でヤツに視線をくれてやる。

なんなんだよ、コイツ！

本当に腹が立つヤツだ。

何考えてるのかまったく分からない。

自分がこうもいい様にあしらわれているということにもムカつく。

悠は自然と眉間に皺を寄せ、不服そうに顔を歪める。

それを楽しそうに崎は眺め、押さえつけた手首をそのままに悠の頬をそっと撫でた。

「なあ：お前はどっちが好みだ？」

「さ：わんなつ」

つう——つと顎の辺りから首筋へと指先を這わせ、くすぐ撥るように弄ぶ。

悠は今更ながらに身の危険を感じ始めていた。

コイツの狙いはなんだ？

斗真が好きなんじゃなかったのか？

ぐるぐると必死で考えを巡らせるが、自分の身に起きた信じたくない反応が気になってそれどころではなくなっていた。

「：やつ」

耳の後ろの辺りを撫でられて、ぴくりと身体が震えてしまった。

な、何で：っ！？

ぴりっと走る小さな電流。

そこから沸き起こる感覚がありえなすぎて、頭の中がフリーズしてしまった。

「それとも…答えられないほど、気持ちイイ？」
「…っ!!」

耳元で囁かれる吐息にビクンと反応してしまう。
身体が熱い。

大嫌いな男の低い声が頭の中で木霊する。
じくじくと鈍い衝動が体内を蝕んでいく。

嵌められた…っ!

自分の意思とは関係なく、崎から与えられる僅かな刺激に体温が上昇していくのを感じた。

「な…っにしやがった…っ」

キツと端整な顔を歪めて崎を睨みつけ、全身で拒否をする。

これ以上こいつに触れられたくない。

こんな感覚…知りたくもない。

崎はそんな悠の気持ちなどお構いなしにその白い肌の上に指先を滑らせた。

「…くっ」

「お前…可愛いな」

うつとりと吐息を零し、首筋をぺろりと舐める。

忌々しそうに睨みつけながら声を震わせる悠の肌を勝手気ままに撫で回すと、満足そうに囁いた。

「フレーバーティーはお気に召さなかったのか？」
「…っ!？」

「ハルカの為に特別仕様にして淹れてやったのにな」

口調は残念そうなのに、ククツと笑っている。

その嫌味な顔が憎たらしい。

これで整った顔立ちでなければ、ホントにもうどうしようもないヤツだと思う。

ああ、もうっ、サイアクだっつ。

「な…に入れたんだよ…っ」

「さあ…教えて欲しいか？」

「ふざけんな…っ、アンタ、いったい何考えてんだよ！」

「何って…それはもちろん、ハルカのことだ」

にやりと楽しげに答えられても真実味がなさ過ぎる。

どう見たって遊んでいるようにしか考えられない。

崎が何を企んでいるのか、まったく見当の付かないこちらの方が断然不利だった。

ままならない身体を少しでも動かし、ヤツから離れようとする。

その一方でこの状況をどう打破するのか思考をめぐらせた。

どうする…？

これは斗真の目の前で散々嫌ってやったことに対する報復なのか？
こうして自分の言うことを聞かせ、僕自身が嫌がる様子を見て楽しんでる。

嫌がれば嫌がるほど、それはコイツを喜ばせることになるということか…。

かといって、こんなヤツに愛想笑いのしっぱを振れるほどプライドがないわけではない。

そんなことをするくらいなら、いっそもうどうにでもしろと思う。

フレーバーティー。

最初に飲んだ、爽やかな香りとその奥にひっそりと佇む独特の甘み。その甘さに、どこか違和感を感じていた。

そしてその後に飲んだアールグレイが甘すぎて、僕は一気にそれを飲み干してしまった。

崎は、それを見て――…

「…っ！アンタ…最初のカップに何か仕組んだな…っ」

やられた。

始めから、こいつはあの紅茶を飲ませるつもりだったんだ。

右利きの悠は、もちろん右側から手を付けるに決まっている。

フォークやナイフと同じように、端から手をつけ始めるのが一般的であり、悠のように紅茶を嗜むたしなものは余計にその仕種が無意識のうちに表れる。

崎はそれを知っていた。

だから、最初に手を付けるであろうカップに何かを入れたんだ。

「…あっ」

「くくっ…いい感じになってきたか？」

ドクンと心臓が早鐘を打ち始める。

激しい運動をしたかのように全身が忙しく高揚し、押さえ付けられていた手首や僅かに触れられている箇所が熱く疼き出した。

はあ…つと堪えるように吐息が零れる。

少しでも気を抜けば、憎らしいほど綺麗な笑みを浮かべているコイツに醜態を晒しそうだった。

「その強気な瞳：服従させてやりたくなる」

「：っ、アンタ、頭オカシイんじゃないの：っ」

「そうだな：カップに媚薬を仕込むくらいには可笑^{おか}しいのかもしれないな」

「な：っんんっ」

自嘲気味にそう言うのと、悠の唇を強引に塞いだ。

抵抗しようにも身体に力が入らない。

その瘦身からは思いもよらないほど強く拘束され、呼吸すらも許されないほど執拗に貪られた。

男なんかには：それも、顔も見たくないほど嫌いなコイツにキスされている。

本来なら気持ち悪いことこの上なのに、身体は心を裏切った。

口腔を我が物顔で蹂躪してくる舌。

ぬるりと艶かしく侵入し、悠のそれを捕らえると吐息ごと奪うようにきつく吸われた。

ジンと痺れる甘い刺激。

それは脳内にまで及び、冷静な判断が出来なくなっていく。

逃げなくちゃいけないのに。

しつこく口付けを繰り返されて、呼吸が上手く出来なかった。

「は：あつ、も：やめ：：：んっ」

「ん：もう降参か？」

ぺろりと濡れた唇を舐め取って、楽し気に微笑む。

ようやく唇を解放されたのに、身体中が熱く疼いてどうしようもなかった。

頬は上気し、肌をほんのり朱に染めてしまう。

それでも挑むような視線を向けると、崎は嬉しそうに目を細めた。

「そうだな…そろそろラクにしてやるよ」

「……っ!!」

顎を捉えていた手をするりと下に忍ばせると、穿^はいていたジーンズの上から下腹部に触れた。

カチャカチャと片手で器用にベルトが外されていく音が響く。

ヤツの意図していることに気が付いて腰を捻って逃れようとするが、足の間に膝を割り入られて抵抗する術を失ってしまう。

「やめ…っ」

ひんやりとした指先が直^{じか}に肌に触れると、ぴくりと身体が震えた。きゅっきゅつとリズムミカルに触れられると先端から蜜が滲み出し、崎の動きをより滑らかなものにしてしまう。

羞恥心から顔を背けるけれど、射抜くような強い視線がこちらを向いているのを感じた。

恥ずかしい。

何で僕がこんな目に。

もう一度己の浅はかさを呪ってみるけれど、後悔先に立たず。

最初から、仕組まれていたなんて今頃気が付いても遅かった。

自身を苛む快感を逃そうとそんなことを考えてみるが、意識を逸らそうとするたびに強く刺激を与えられる。

感じたくなてないのに、薬によって高まってしまった身体はひどく敏感だった。

「は…っ……あっ!」

「イイ声で啼くな…」

「…っん…耳元で…しゃべ…んな…よっ…くっ」

「ココか…？」

「ふぁっ…！」

どんなに抑えようとしても無意識のうちに声が零れる。

不本意な甘い嬌声が、崎の弑逆心を煽る。

崎は堪えるような悠の表情をひとつも洩らさぬよう食い入るように見つめた。

ビスクドールのような透明感のある綺麗な顔立ち。

つんとした生意気な瞳と、気高さを惹き立てるハニーブロンドの髪。そのどれもが今は自分に向けられていることに、崎は心が擦くすくすられるのを感じた。

もっど酷くしてやりたい。

そんな気持ちを表すように蜂蜜のような甘い声が掠れて泣き出すまで、悠自身を責め立てた。

「で、結局どっちなんだ？」

「…っ！」

何事もなかったように自分に問いかけるコイツの態度に腹が立つ。結局いいように弄ばれ、コイツが飽きるまで付き合わされてしまった。

悠はソファに寄りかかり、無造作に置かれているクッションを崎にブン投げた。

ぼすつとヤツに当たるけれど、なんてこともないように飄々と受け止められている。

ああムカつく!!

自分の失態にイライラしながらヤツを睨むけれど、逆に喜ばせてしまったみたいだった。

「まだ足りなかったのか？」

「ふざけんなっ!!!!」

バカにするように囁いてくる声に不覚にも感じてしまった悠は、誤魔化すようにもうひとつクッションを投げつけた。

それも軽々と受け止めて、崎はニヤニヤと満足そうに微笑む。

「ま、どうせお前はこっちのアールグレイベースの紅茶の方が好みだったんだろう？」

「っ!!!!」

凶星を指され、悠は頬を紅潮させてしまう。

崎は射殺さんばかりの視線を易々^{やすやす}と受け止めると、何か企むような笑みを浮かべた。

淹れ直した紅茶を目の前でカップに注ぎ、悠に差し出す。

「お前のためにブレンドしたんだから当然だよな。それ：気に入ったんだろう？」

「…ホントにアンタってムカつく!!!!」

もうどうにも勝てそうにないと踏んだ悠は、大人しく差し出されたカップを口に付けた。

けれど自分の意思を主張するようにヤツに背を向けて、香りを堪能する。

はあ…やっぱりいい感じだよね、コレ…。

考案したのがコイツだと思うと腹が立って仕方がないが、美味しいものに罪はない。

ほっと落ち着くふんわりと温かい湯気に癒されながら、本末転倒なことを考えていた。

元はといえば、最初からこんなことする必要なんてなかったのに。でもまあ、気に入ったものが増えることは良い事だ。

そう前向きに考えることにして、今はヤツの存在を無視した。

「ハルカ：俺にも寄こせ」

後ろから抱きすくめられて耳元で甘く囁かれる。

ぞくりとする声が聞こえて、悠はぴくんと肩を震わせてしまった。

「近寄んなっ：アンタの分も淹れればいいだけだろっ」

崎が相手だといついつい荒くなる自分の言葉に動揺が隠せない。

コイツといると冷静でいられなくなる。

それはある意味、崎を意識しているということでもあった。

大っっ嫌いだけど。

「龍一。」

「…は？」

「いい加減、名前で呼べ」

「何で僕が…っ、ヤダね」

ふんつと顔を逸らすけれど、ぎゅつと抱きしめる腕に力を込められて慌てた。

零れそうになるカップを両手で支えて、その場から逃げようとするが妨害されてしまった。

「呼べるようにまでこうしていてやろうか…？」

ちゅくつと首筋に唇を落とし甘く誘惑してくる。

悠は再度身の危険を感じて首を竦めるが、抗おうにも両手は塞がっているし身体は拘束されているしでどうしようもなかった。

「んっ…離せよっ」

「ほら…早く言え」

傲慢不遜な言い方にカチンとくる。

どうしてコイツはいつつもこういう言い方しか出来ないのだろうか。

「アンタがこの僕にお願いしたら言っただけでもいいよ」

どうせ言えないだろう？と高を括って言い放つと、少し驚いたような顔をしたが、すぐにまたいつもの憎たらしい笑みを浮かべる。

崎は片腕を腰に回し、もう片方の腕で悠の顎を捕らえると、覗き込むように顔を近づけて甘く囁いた。

「お前の全てを俺にくれ…ハルカ」

からかうような視線は何処にもなく、熱っぽく見つめられる。

じっと見つめ返すと、何の躊躇ためらいもなく欲しがってくる瞳とぶつかった。

なんて顔してやがんだよ、コイツ…っ。

一瞬でも崎に対して動揺してしまった自分に驚く。

どくんと胸の鼓動が高鳴ってしまうのを感じて、尚更自分の気持ちに戸惑った。

「…ういち」

か細い声で小さく囁く。

崎はその声が何を指しているのかわかっているくせに、再度強要した。

「ん…？何だ。ちゃんと言え」

「…っ！！知らないよっ、バーカっ」

もう二度と言ってやらない、と宣言する悠の顔が薔薇色に染まっているのを見て、崎は満足そうに微笑んだ。

「好きだよ、ハルカ」

「僕はアンタなんか大っっ嫌いだっ！！！！！！」

つんと答えるけれど、ヤツは嬉しそうに笑ったままだ。

ほんつとにコイツ、ムカつく！！

余裕の笑みを浮かべる崎に、いつかぎゃふんと言わせてやろうと心に誓ったのだった。

悠の場合。(後書き)

まずは本編・chronosに投票してくださった読者様、本当にありがとうございますv v

たくさんの方からの応援のコメントや感想をいただき、貴重な1票をいただけてとても嬉しいです!!!

本当に本当にありがとうございます。

このような場所で申し訳ないのですが、すべての読者様に感謝の気持ち。

とても励みになりました♪(^^)

最終回にちよこつと出ていた悠と崎の関係。

凄く書きたかった話だったので、思ったよりもボリュームがスゴイことになってしまいました。

分ければよかったかなとちよつと後悔していますが、少しでも楽しんでいただけたら幸いです。

隼人の場合。(前書き)

本編十四話・二十二話を隼人視点で書いたお話です。

隼人の場合。

向けられる笑顔が欲しいと思った。

泣き出しそうなあの子を、俺が守ってやりたいと思った。

たとえばそれが――弟みたいに大事なあいつから奪ってしまうことになったとしても。

大学2年の春。

隼人は悪友の響と共に、サークルの新生歓迎会を開催していた。

ライ部の新歓は至って健全で、大学構内の中庭を占領して飲み食いしたり騒いだりするだけのものだ。

理由は、酒が入るといろいろと面倒だから。

それは響がライ部を設立する時に決めた部則でもある。

ただ単に、部長である響が酒に弱いということも起因しているのだから。

まあそんなわけで一人ずつ自己紹介やら興味のある分野などを言うていく。

その中で一人、知り合いではないけれど隼人にとっては見慣れた新入生がいた。

「宮沢斗真です。経済学部にも所属しています。好きな音楽は主にクラシック系です。よろしくお願いします」

恥ずかしそうに自己紹介をしていた学生の顔を見て、隼人は驚愕きょうがくした。

あの子は……

隼人は彼の顔を食い入るように見つめた。

ちょうど少年と青年の間くらいの危うさを残した幼い顔立ち。少しクセのあるこげ茶色の髪と、同じ色の澄んだ大きな瞳。

透き通るような白い肌。

遠めから見ていても可愛いと思っていたが、こうして近くで見るとよりその愛らしい顔立ちに自然と目が惹かれる。

俺は以前からあの子を知っていた。

何故なら弟のように可愛がっている北条蓮の想い人だったからだ。蓮は、時折蓮のバイト先にやってくる斗真に一目惚れをしていた。高校時代から交流のある俺は、よくそのことを相談されていた。

名前も知らない、歳も分からない少年に恋をしてしまった蓮。

他人にまったく興味がなかったあいつが、年下らしい（実際は同い年だった）：しかも同性を好きになったと聞いたときには驚いたものだった。

まあ、無表情で何考えてるのかわからないあいつが、そのことを話す時だけ年頃の男らしい表情かおをしてたから、兄貴分としてはほっとしていたんだが。

俺はチャンスだとばかりに彼と交流を持つべく近寄ることにした。

「よっ。お前：宮沢斗真だっけ？俺は法学部2年の佐久間隼人。隼人でいいぜ。よろしくな」

ニカッと笑うと、斗真は少し緊張気味に言葉を返してくれた。

「あ、はい。よろしくお願いします。僕も斗真でいいです、佐久間先輩」

おずおずと様子を窺う斗真は、小動物みたいで可愛い。

自分よりもずっと背の高い隼人に対して上目遣いに挨拶を交わし、

差し出された右手を取って握手した。

「隼人でいいっての。そういや斗真って、何でライ部に入^{うち}ったんだ？」

そこら辺に腰を下ろし、適当に缶ジュースを手渡して話しかける。
俺は斗真を怖がらせないように少しだけ視線を落とした。

「何となく、気軽に趣味の話が出来そうだなあと思って。それに、
気の合う人とコンサートとかに行けたら楽しそうだなあと思ったからです」

同じように腰を下ろし目線が同じ高さになって安心したのか、ほっとした表情で話し出す斗真。

無邪気な笑顔が眩しくて、隼人は空気が和むのを感じていた。

「そっか、そりゃ良かった。ウチは気さくなのがウリなんだぜ。活動とかに関係なく、何かあったら遠慮なく言えよ？」

「ありがとうございます、佐久間先輩」

「だから隼人でいいつつってんだよ。先輩命令」

ガシガシっと斗真の頭を軽く撫でると、斗真は驚いたような顔をした。

うん、思ったより撫でやすい頭だな。

それに髪質が良いのか、手触りが気持ち良い。

「うわっ、止めてくださいよおっ。ちょっ…先輩！」

「隼人って呼んだら許してやるぜ」

にやりと笑ってやると、最初は抵抗していたもののすぐに諦めたよ

うな口調で言った。

「わかつ…わかりましたから隼人先輩！マジで止めてください〜っ
っ」

「ちっ…先輩はいらねえってのに」

「さすがにそれは無理ですよ」

ちよっぴり涙目になりながら訴える顔が可愛かった。

くく…これは思ったよりもからかい甲斐があるヤツだな。

俺は当初の目的をすっかり忘れ、思わぬところで見つけた獲物に喜びを感じていた。

翌週。

サークルのミーティングに斗真がやってきたのを見計らって、隼人は蓮を紹介した。

「斗真、紹介するぜ。こいつが俺の弟分でお前と同じ年の蓮だ。ちよつと無愛想だけど、仲良くしてやってくれな」

「あ、はい。宮沢斗真です。よろしくね」

「北条蓮だ。よろしく」

斗真が同じ大学でしかもライ部に入部したことを知った隼人は、すぐさま蓮を入部させた。

もちろん、斗真と知り合うために。

蓮は相変わらずの無愛想・無表情で挨拶を交わしているが、実は緊張しているのが見て取れる。

それは、長年一緒にいた俺にしか分からないものだが。

「……」

「…?」

「……………」

「…うう」

「お前ら、会話無いのかよ」

いつまで経っても無言の蓮に、ふう…とため息が零れる。

斗真は蓮の無愛想振りに緊張してしまい、困ったように泣きそうな顔をしている。

これじゃあ何のために連れてきたんだかやら。

何だかお見合いをしているように固まってしまった二人に、やれやれと先が思いやられるのを感じながら俺はお節介を焼いてやることにした。

「斗真。コイツはこう見えて、料理好きなんだぜ。ずっとレストランでバイトしててな。こーんな仏頂面してお菓子とか作れちまうんだぜ。意外だろ?」

「隼人さん…俺は仏頂面なんかしてないですよ」

「事実だろ。ったく、お綺麗な顔してても性格がこんだから、中々友達が出来ねえんだよっ」

ガシガシと蓮の頭を撫で容赦なく髪をグシャグシャにしてやると、余計に嫌そうな顔をした。

そんな蓮を見ていた斗真は、自分もやられたことがあるせいか同情するように微笑した。

「そうなんだ。大丈夫? 隼人先輩って、見たまんま豪快だからちょっと痛いよね」

「…宮沢もやられたのか。子供扱いするなといつも言ってるんだが、まったく聞いてくれなくて困るな」

「斗真でいいよ。隼人先輩っていつもあんな感じなの? 北条くんっ

て大変なんだね」

「蓮でいい。あの人は、何を言っても聞いてくれないからな。マイペースなんだ」

「あ、それちょっとわかるかも」

ふふっと笑う斗真につられて、蓮も苦笑を洩らす。

人をダシにしているのは気に食わないが、まあなんとか大丈夫そう
だ。

「お前ら：普通本人目の前にして言うか？　ったく、可愛くねえな」

「隼人さんに可愛いとか思われても嬉しくないですよ」

「うわあゝお前ホンット可愛くねえ！」

今こうしているのは誰のおかげだと思ってやがるんだ、ああ？　と目
線で訴える。

いっそのことバラしちまっても、俺には関係ねえし。

いいのか？　とチラリと流し目をくれてやると、蓮はうっと困った顔
をした。

くくっ、やっぱこうでないとな。

しばらくは斗真をネタにこいつで遊べそうだ。

日々の楽しみが増えたことに、俺は心が躍るのを感じていた。

いつしか俺は、斗真と蓮：そして二人の友人・五十嵐悠を観察し、
遊ぶことが日課となりつつあった。

二人に囲まれている斗真は相変わらず可愛くて、自然と笑みが零れ
てしまう。

学部の違う俺が斗真たちと会う機会は本当に少なかったが、それで
も気が付けばあの溢れんばかりの笑顔を探していた。

最初はぎこちなく接していた蓮も、斗真の友人として周囲からも認知されるようになる。と肩を回したり頭を撫でたり可愛がる様子を見た。

以前からは考えられないほど穏やかな表情をするようになり、斗真や悠の傍に居る時だけは感情を表に出すようになっていった。

どんだん年頃の：普通の男がするような表情かおをする蓮に、安堵を覚えるのと同時に少し憎らしくも思うようになった。

そして俺は、それを好ましくも思う。

感情を殺した人形のような顔をされるよりはずっと良い。

誰かを好きになることでこうも良い方向へと進んで行ってくれたなら。

そして自分自身も…

ずっと、あの子には笑っていて欲しいと願う。

それが…たとえどんな感情だったとしても、告げる気はさらさらなかった。

あの日までは。

「おい、大丈夫か？」

夜、飲み物が切れたついでに煙草とビールでも買うかとコンビニに行った帰り、具合が悪そうに佇む人が目に入った。

高校生くらいだろうか？

声を掛けてもぴくりとするだけで、返事がない。

よほど体調でも悪いのだろうか？とそいつに近寄ると、見慣れた顔が目に見え込んだ。

「っ、お前斗真か！？こんなとこで何してんだよ！」

震える身体を抱きしめて、今にも倒れてしまいそうな斗真に焦った。

いくら言葉を重ねても、何処も見えていない。

まるで出逢ったばかりの蓮のようだ。

意識がまったくコッチにいない。

何かを見ているようで何も見てなどいない。

ゆらゆらとただ漂うようにそこにあるだけで。

このままじゃマズイ：っ！

本能的にそう判断した俺は、斗真の肩を掴んで必死に呼びかける。

「斗真っ、おい斗真っ！！しっかりしろっ！！！」

頼む：っ！

いなくならないでくれ！

こんなお前は：見ていられない：！

馬鹿みたいに俺はただ名前を呼んで、引き戻そうとした。

やめてくれ。

お前のこんな顔はみたくない。

幾度か呼び続けると、斗真はようやく我に返ったように口を開いた。

「は：やと、せんぱい：？」

「俺がわかるな！？どこか痛いのか！？」

「いえ：だい：じょうぶ、です」

大丈夫だという割りに、焦点が未だ定まっていない。

ぼんやりとした大きなこげ茶の瞳には涙が溢れ、その白い肌を伝っていた。

止め処なく流れる雫は斗真の心を代弁しているようだった。

自分が泣いていることにすら気づかないで他人に気を使う斗真に、俺は悔しさにも似た苦い想いを抱いた。

「どこが大丈夫なんだよ！！こんなに泣いて…いったい何があったんだ？」

誰だ、こんなに斗真を傷つけたのは。

斗真の頬を両手で包み込むと、その手にすっぽりと納まった。

いつもは笑っている顔が、今は壊れてしまいそうなほど痛い表情をしている。

俺なら、こいつにこんな顔は絶対させないのに… ——！！

そこまで想って、はっと我に返る。

どうして、そんなことを——？

答えは至極簡単だった。

ああ、俺は…愛してたんだ。

きっと…初めてお前を見た瞬間から——誰かから奪ってしまいたいほどに。

いつの間に、ただ見ているだけじゃ足りないと思うくらいに好きになっただんだろうか。

自嘲気味に心の中で独りごちると、俺は斗真の身体を優しく抱きしめた。

「気が済むまで泣け。溜めるのが一番良くないからな」

斗真にこんな顔をさせられるのは、きっとあいつだけだ。

あいつは俺が好きだったことは知らない。

最初から斗真を恋人にしたいなんて思っていなかったからだ。

俺はただ、外から見ているだけで十分だったから。

きっと、俺が無理に欲しがればあいつは逃げるだろう。

孤独の中で生きてきたあいつは、外見によらず臆病だから。

だから笑って傍観していられたのに。

自分の気持ちが成長していたことに気が付いてしまったら、あとは自分自身がどうしたいかだけだ。

今は…こいつが、泣き止んでくれればそれだけでいい。

それだけを思って、全てを包み込むように抱きしめた腕に力を込めた。

「せ…んぱいじゃ、ダメなんです…っ。僕は蓮が傍にいないと……
笑えない…っ」

搾り出すような声でそう言った斗真は、瞳に涙を浮かべて必死に堪えていた。

ああ…俺が泣かしたんだ――

そのことによりやく気が付くと、俺はそつと触れていた腕を放した。こいつの笑顔が欲しかった。

だけど、斗真が望んでいるのは俺ではなかっただけの話だ。それでも。

怯えるように訴える瞳は、今は俺だけのものだ。

こいつを大切にしたいくて、悲しい思いをさせたくなくて手を出してしまったのに、自分がそうさせていたのでは全く意味がなかった。

「そんな表情^{かお}をさせたかったわけじゃねえ…」

それなのに、自分だけに見せてくれた表情が嬉しいと思ってしまう矛盾。

俺は自分自身に呆れて苦笑を洩らした。だめだ。

今更しゃしゃり出ってしまったコト自体が間違ってる。

それでも無理をしている斗真を見ると、どうしても守ってやりたくなってしまふのだ。

ったく、全部蓮のせいだ。

あいつがしっかりしてねえから、奪ってしまいたくなる。

「あいつが…お前を好きだと知った時から諦めたつもりだった。けど、お前がそんなにも無理した顔ばっかするから…つい、籬^{たが}が外れちまったんだ」

悪かったな、と微笑むと斗真はあからさまにほつとしたような顔をした。

俺はそれがちょっと気に入らなくて、少しだけ意地悪をしてやる。

「けど、いつまでもそんな顔してると…次は本気で奪いに行くからな？」

「…っ！」

ぴくりと驚いたように大きく瞳を瞬かせた斗真の反応に、俺はしてやったりと心の中でほくそ笑む。

本当は、もう手を出す気なんてサラサラなかったけれど。最後くらいは…と強引に奪った唇。

あいつの唇は、ふっくらとして柔らかかった。

甘い…感触。

もう少し味わっていたかったけれど、仕方の無いことだ。

むしろ、蓮にバレたら殴られること必須だ。

まあ、なんとかなるか…と気楽に考えることにして、俺はこの想いを閉じ込めることにした。

「ああゝ恋してえなあゝ」

「…ついに頭でもイカレたんか？」

春だしなあ…と呆れたように答える相棒に、俺は少しムっとした。つた、自分は幸せだからンなこと言えるんだ。

「なんだってあんな我侭ボンが好きなんだかね」

「っ！…！ちゃうわっ！だーれがあんなヤツを好いとるかっつーのっ」

「誰もお前のことだなんて、言ってねえけど？」

真っ赤な顔して憤る響にニヤリと笑ってやると、してやられた…と恥ずかしそうな顔をした。

ああ、やっぱこいつはこうでないと。

ぎゃーぎゃー怒る響を尻目に、俺は心が浮上するのを感じた。

うん、やっぱこいつはイイ。

実にからかい甲斐があるってもんだ。

響は他人の恋情に鈍い。

他のことには良く気が付くくせに、自分に寄せられる感情や他人の色恋沙汰にはまったくと言っていいほど分かっていない。

まあ、だからこそ居心地がいいのだが。

「じゃ、御堂^{みどう}なんか止めて俺と付き合うか？」

「ぜってーヤダ。」

「うっわあ。今フツーに傷ついたんだけど俺」

「何ゆうとんねん、隼人がンなタマかい」

「くくっ、まあな」

相変わらずのやり取りが嬉しい。

何気ない毎日が、少しだけ失ってしまった俺の日常を楽しませてくれる。

今はまだ。

「夏になったらどっか合宿でもやるか」

「おっ、そりゃエエ！んー、やっぱ海とか？湘南とかええかもなっ」

「海か…たまにはいいな」

夏になったら。

新しい出会いの予感。

——今度は間違えない。

そう思うことにして、次の恋へと想いを馳せるのだった。

隼人の場合。(後書き)

番外編まで読んでくださった読者様、ありがとうございます。

ひとまず『chronos』シリーズはこれにて終了です。

気が向いたらサイトのほうにupするかも…です。

ご要望などがございましたら、お気軽にメッセージまたはコメントをお寄せくださいませv

次回作にてまたお会い出来ると嬉しいです。

投票してくださった皆様、最後までお付き合いくださった皆様、本当にありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7736g/>

After chronos

2010年10月9日01時34分発行